

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

山路来て何やらゆかし董草（『野ざらし紀行』）

松尾芭蕉の句に詠まれるように、スミレは山道のやや明るいところによく生えている。しかし、山野に咲くイメージが強いスミレも、気をつけてみるとコンクリートの割れ目や石垣の隙間など、街のなかでも見ることができると。

スミレの種子には「エライオソーム」というゼリー状の物質がフチャクしている。この物質はアリの好物で、お菓子の「おまけ」のような役割を果たしている。子どもたちが「おまけ」欲しさにお菓子を衝動買いしてしまうように、アリもまたエライオソームを餌とするために種子を自分の巣に持ち帰るのだ。このアリの行動によってスミレの種子は遠くへ運ばれるのである。

しかし、アリの巣は地面の下にある。地中深くへと持ち運ばれたスミレは芽を出すことができるのだろうか。もちろん心配はゴムヨウ。これも計算のうちである。

アリがエライオソームを食べ終わると、種子が残る。種子はアリにとっては食べられないゴミなので、巣の外へ捨ててしまうのだ。このアリの行動によってスミレの種子はみごとに散布されるのである。

アリの巣は必ず土のある場所にある。街のなかではアリの巣の出入口はアスファルトやコンクリートの隙間をうまく利用している。野の花のイメージが強いスミレが街の片隅のコンクリートの隙間や石垣に生えているのは、わずかな土を選んでアリの種を播いてもらっているからにはかならない。A、アリのゴミ捨て場所には、ほかにも植物の食べかすなども捨てられているから、水分も栄養分も豊富に保たれているという特典つきである。

スミレは花にも驚くべき秘密がある。スミレの花をよく見ると、花を長くして後ろへ突き出た形になっている。この突き出ているのが「距」と呼ばれる部分である。距は蜜の容れ物になっている。茎は前方の花の部分と後方の距の真ん中についていて、やじろべえのようにバランスをとっている。花を長くするために、中央でバランスをとるような構造になっている

のである。

② そうまでして花を長くしたのは理由がある。花にはさまざまな虫が訪れる。花粉を運んでくれる虫もいれば、花粉を運ばずに蜜だけを盗んでいく虫もいる。スミレは玉石混淆の虫のなかから、真に花粉を運んでくれるパートナーを選び出さなければならぬ。そのため長い花を作り上げたのである。

『イソップ物語』の「ツルとキツネ」では、ツルがごちそうした長い筒状の容器では、キツネはスープを飲むことができなかった。代わりにキツネがごちそうした平たい容器では、ツルはスープを飲むことができなかった。スミレの花粉を運んでくれるのは、舌を長く伸ばすことのできるハナバチの仲間である。だから、ツルの話と同じように長い筒状の容器を用意すればいい。これがスミレの花が長くなった理由である。

花のなかを覗いてみると、雌しべのまわりには膜があって、ちょうど片手で水をすくうときのような形になっている。片手の中指の部分が雌しべになっていて、雌しべと膜とで花粉を入れる容れ物となるのだ。そして、雄しべは花粉をこの容れ物のなかにすべて落として入れてしまうのである。

これで準備は整った。ハナバチが訪れて、花のなかに頭を突っ込むと、五本の指から中指が離れるように雌しべの部分がずれて容れ物の隙間ができる。そして、花粉がこぼれ落ちてハナバチの頭に降りそぐのである。忍者屋敷のしかけを連想させるような何とも手の込んだ構造になっている。

B、こんなに用意周到に準備して待っている、春を過ぎるとハナバチはすっかり訪れなくなってしまった。そのころになるとスミレはつぼみ（蕾）のまま、花を咲かせなくなる。別にふててしまったわけではない。つぼみのなかで雄しべが雌しべに直接ついて、受粉してしまうのである。開くことなく種子をつけるこの花は「閉鎖花」と呼ばれている。閉鎖花は最初から咲く気がないのである。

たしかに、自分の花粉をつけるよりも他の花から運んでもらった花粉をつけるほうがいい。そのほうが、さまざまな遺伝子を持つ子孫を残すことができるからである。しかし、それはハナバチが訪れてくれればの話である。いくら理想を語っても種子が残せなければ意味がない。そこで次善の策として自分の花粉で受精するのである。

この閉鎖花にもメリットはある。

一つは虫まかせな方法に比べて、確実に種子を残すことができる。さらに季節にも左右されないで、ハナバチが訪れなくなった夏から秋まで種子の生産が可能である。もう一つは、コスト削減が可能な点にある。虫を呼びよせるための花びらも蜜も必要ない。花粉も受精に必要なサイテイゲン^⑤の量を用意すればいいのだ。

ひっそりと咲くスマレを「ゆかしい」と評した松尾芭蕉も、もしこの花のしたたかさを知ったなら、一体どう表現しただろうか。

(稲垣栄洋『身近な雑草のゆかいな生き方』)

注 玉石混淆 〓 いいものと悪いものが入り交じっていること。

問1 〰〰〰線 a 〰 e のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 A B に入れるのに最も適当なことを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選んで、記号で答えなさい。ただし、同じものを二度使うことはできません。

ア したがって イ しかし ウ たしかに エ そのうえ オ そして

問3 線①「街のなかでも見ることができ」とありますが、それにはアリの行動が関わっているとされています。その行動を、三十字以内で二つ書きなさい。(、や。もふくみます)

問4 線②「そうまでして花を長くしたのは理由がある」とありますが、なぜ、スマレは花を長くしたのですか。その理由として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 忍者屋敷のような手の込んだしかけを作ること、真のパートナーを選び出すことができるから。
イ 花粉を運ばずに蜜だけを盗んでいくような虫に、蜜を取られないようにすることができるから。
ウ 茎が花の部分と距の真ん中に付いているので、花が長いほうがバランスを取りやすいから。
エ 雄しべが、花粉を入れる容れ物に花粉を入れる時に、花が長いほうが花粉を落としやすいから。
オ 花に訪れる様々な虫の中から、蜜だけを運ぶことの出来る虫を選び出すことができるから。

問5 線③「理想」とありますが、ここで言われている理想とはなんですか。五十五字以内で説明しなさい。(、や。もふくみます)

問6 線④「したたかさ」とありますが、筆者はスマレのどのような姿が「したたか」と考えていますか。最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 子孫を残すためにさまざまなしかけを作り、たくましく生きている様子
イ 春にしか花を咲かせられないといった、かろうじて生きている様子
ウ 虫を利用するだけ利用して、十分なお礼をせずにくく生きる様子
エ 山野だけでなく石垣の隙間でも、かぎりけなくひっそりと生きている様子

問7 線「松尾芭蕉」とありますが、次のア～エの中から松尾芭蕉の作品を一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 古池や 蛙^{かわず}飛びこむ 水の音
イ 柿^{かき}食えば 鐘^{かね}なるなり 法隆寺^{ほうりゅうじ}
ウ すずめの子 そのけそこのけ お馬が通る
エ 分け入っても 分け入っても 青い山

〔二〕 次の各問いに答えなさい。

問1 次の——線①～④のことばを国語辞典で調べようとする場合、何ということばを引けばよいですか。すべてひらがなで答えなさい。

わが家の犬は、いつも走^①っているが、少しもつかれた様子^③をみせず、とても楽^④そうで、その姿はともかわいらしい。

問2 次の①～⑤の四字熟語は、ア～ウのどれにあてはまりますか。それぞれ記号で答えなさい。

- ① 合格発表 ② 春夏秋冬 ③ 正六角形 ④ 学級文庫 ⑤ 東西南北

- ア 独立した四字が組み合わさっている。
イ 三字熟語に一字加わっている。
ウ 二字熟語が二つ組み合わさっている。

問3 次の①、②の——線のことばを敬語に直しなさい。

- ① 先生から高価なものをもらう。
② 先生に手紙をあげる。

問4 次の①～④の——線のことばは、アとイのどちらにあてはまりますか。それぞれ記号で答えなさい。

- ① 父が時計を合わせる。 ② 知識が深まる。 ③ 本が破れる。 ④ ご飯を残す。

ア 主語の動作・作用を表すことば。

イ 主語が他にはたらきかける動作・作用を表すことば。

問5 次の①～⑤の□に当てはまる慣用句として最も適当なものを、ア～オの中からそれぞれ一つずつ選んで、記号で答えなさい。

- ① そんな情報まで知っているとは、君は□。
② テストの結果が□さまであった。
③ 今度の休みは海外へ□ことにしました。
④ □ころ、電話をください。
⑤ おそろおそろ食べたが、このメニューはぼくの□ものだ。

ア 口に合う イ 目も当てられぬ ウ 手があく エ 耳がはやい オ 足をのばす

(三) 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

サンペイ君(中田)は、いつもぼんやりしている、それでいて大人っぽい話し方をする小学六年生であった。クラスの皆は、クラス内で力のある福ちゃんがサンペイ君を嫌っていることもあって、サンペイ君をあまり相手にしていなかった。サンペイ君とただ一人つきあっていて博士(大窪)は、ある日、クラスのこととサンペイ君と言い合いをしてしまい、それ以来、二人の関係は気まずいものになってしまった。次は、それから数週間後の出来事である。

三月になったばかりの昼休み、博士は例によって一人で本を読んでいた。

昼休みが半分過ぎたことを告げるチャイムが鳴った時、廊下をあわただしく走る足音が聞こえてきた。

「ハカセ君、急いで来てくれないか」

息を弾ませた声に振り向くと、サンペイ君が教室の入口のところに立っていた。

突然のことで驚いたのが一番だったけれど、同時にすぐうれしくて、博士は「いいよ」と立ち上がった。

「とにかく急いで来るのだ。ハカセ君は是非見に来るべきなのだ」
ちよっと高飛車で、なのに憎めない、言葉を交わさなくなる前とまったく同じサンペイ君だった。

後についていく時、サンペイ君の服にちこち泥がついていることに気づいた。

サンペイ君は校舎を出て、まっすぐに瓢箪池に向かった。池のほとりには釣り竿が投げ出されていて、大きなタモ網が水の中に半分浸してあった。泥にまみれた取っ手をむんずと握み、持ち上げると、水が飛び散るのも構わずに大きく振って博士の前に差し出した。

博士の目は網の中に吸いよせられた。黒っぽい銀色の魚が、木漏れ日を反射しながら力強く身をくねらせていた。

「ヌシなのだ。水がぬるんで、やっと釣れたのだ」

いつものように淡々と**淡々**と言おうとしているけど、どことなく声がうわずっていた。

「すごい……」博士はひとこと言って黙り込んだ。

本当にすごいと思った。サンペイ君はずっと「ヌシ」のことを話していたけれど、ここまで大きく立派なものだなんて想像していなかった。

ゲンゴロウブナ。たしか、そうだ。顔の後ろから背びれにかけてこんもりと盛り上がったたくましい形をしていて、なによりも大きかった。たぶん、五十センチ近くはあるんじゃないだろうか。サンペイ君や博士の体の幅よりもずっと大きい。

サンペイ君は嘘をつかない。博士はなんだかじーんとしてしまっただけで、その場に立ちつくした。遠くで午後の授業が始まる五分前のチャイムが鳴っていたけれど、そのチャイムの意味さえ気がつかなかったほどだ。

「さあ、ハカセ君、そろそろいくのだ」

サンペイ君はタモ網を水に戻して、服に付いた乾いた泥を払った。

③「ねえ、サンペイ君、この魚どうするの」博士は熱のこもった口調で言った。

「そうだな。放課後まではこうしておくとして、とりあえず飼ってみるかもしれないな。でも、飼いきれないなら魚拓を取るのだ。こいつは魚拓を取るのに値するのだよ。おじさんが帰ってきたら見せなければならぬのだ」

「みんなには見せないの」

「なぜ、そんな必要があるのだい。ぼくはヌシを釣っただけで満足なのだ」

博士は小さくため息をついた。サンペイ君はいつもそうだ。

近くに銀色のバケツが転がっていた。博士はそれで池から水をくみ取り、タモ網を上げて中にそいつを落とした。バケツはいかにも小さかったけれど、体を少し丸めるようにしてなんとか収まった。

「なにをするのだね、ハカセ君」

サンペイ君が少し慌てた口調で言った。

「いいから、いいから」

博士はバケツを持って走り始めた。水がちやぶちやぶ撥ねて指に触れ、冷たいのになぜか気持ちよかった。

サンペイ君はほら吹きじゃない。本当にすごいんだ。

心の中でつぶやきながら、ぐんぐん走った。こぼれた水は指だけじゃなく、シャツやズボンまで濡らしたけれど、それも気にならなかった。

教室の扉をガタンと開けたのは、午後の授業が始まった瞬間だった。

「大窪、どうした。遅刻だぞ。それにどうした、中田まで——」

柿崎先生の声を無視して、博士は大声を出した。

「ヌシやでー、ヌシが釣れたでー、サンペイ君が釣ったんやで」

みんながぼかんと口を開けてこっちを見ている。自分が関西弁で話しているのに気づいたけれど、それはどうでもよかった。

「ほら、みんな、見いや。でかいでえ。ほんま、でかいでえ」

「ハカセ君、やめるのだ。ぼくはこんなのは好きじゃないのだ」

そう言いながらも、サンペイ君は本気で止めようとはしなかった。どっちにしたらって博士はサンペイ君の願いを聞き入れるつもりなんてなかった。

博士は教室を小走りに移動して教壇の前に立った。

「大窪、どういうつもりだ」

先生の言葉をまたも無視し、博士はバケツの口を傾けてみんなの方に向けた。それだけでは見えなそう、バケツを床に置いて中からゲンゴロウブナを掴みあげた。手で持つというより、体で抱え込んだ。

どよめきが、漏れた。

「すげえじゃん」と誰かが言い、次々に賞賛の聲が上がった。魚が嫌いな女子がいて、「いやだー、やめてよ」と大声で抗議した。

でも、博士は無視した。

ア 皆に信じてもらえなくても釣^{つり}を続けて、とうとうゲンゴロウブナを釣り上げたサンペイ君に少し嫉妬^{しつと}している。
イ 意志をつらぬき通す大切さをサンペイ君に教えてもらったように感じ、これから自分はどうするべきか考えている。

ウ これまでのクラスの皆の冷たい態度を必死にたえてきたサンペイ君のことを思い、激しい怒りがこみあげてきている。

エ 数週間前のことを申し訳なく思うと同時に、サンペイ君の立派さ、強さに改めて感動し、胸がいっぱいになっている。

問5 — 線③『「ねえ、サンペイ君、この魚どうするの」博士は熱のこもった口調で言った」とありますが、この部分から、「博士」のどのような気持ちが読み取れますか。この後の「博士」のとした行動を参考にして、四十字以内で説明しなさい。(、や。をふくみます)

問6 にあてはまることばとして最も適当なものを、本文中から四字でぬき出しなさい。

問7 — 線④「窓からの光が反射して、教室全体が一瞬、おひさまの金色にほーっと輝いた」について説明したものとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア サンペイ君と福ちゃん^{たなか}の闘^{たたか}いがサンペイ君の勝利に終わったのをクラスの皆が心から喜んでいて、ということ
を表現している。

イ サンペイ君と福ちゃん、そしてクラスの皆が、この出来事を通して一つになることができたと感じていること
を表現している。

ウ ゲンゴロウブナをめぐる小学生たちの熱い思い、ほとばしるような情熱を、太陽の光に輝く水しぶきにたとえて表現している。

エ 小学生の子どもらしい、そしてそれゆえに純真で真剣なやりとりをあたたかい眼差^{まなざ}しで見守る先生のやさしさを表現している。